



# 同好会ひろば

第300号

R6. 3. 7

No.5

## 1年間の活動を振り返って

今年度の同好会は、「人とのつながりを大切にする同好会活動～憧れの人が見付かる同好会活動を目指して～」をテーマに掲げ、その実現を目指して全ての活動を進めてきました。

### <研究活動を振り返って>

研究主題を「持続可能な社会の創り手となる子どもを育てる社会科学習～子どもが主体的に学び続けるための手立ての開発を目指して～」と設定し、小学校と中学校がこれまで以上に連携を図りながら互いに議論を重ね、目指す子どもの姿に迫ることができるよう運営しました。また、各部会の開催に際しては、推進部員が主体的に研究活動に取り組むことができるよう、様々な工夫を凝らしました。

### <研修活動を振り返って>

5月に第1回ステップアップ研修全体会を開催し、名古屋市立小中学校長会 社会科部会長の出井伸宏先生にご講演いただきました。このご講演からヒントを得て、7月に開催した第2回ステップアップ研修全体会では、過去の指導体験記録で特選に入賞された4名の先生方を招き、ご講話いただくことで、参加者が体験記録を執筆する上でのコツをより具体的に学ぶことができました。授業づくり講座では、1名の講師から話を聞いて学ぶ従来の形式ではなく、複数の講師から教材を紹介してもらったり、自分の授業についてアドバイスを受けたりする新たな形式に変更して開催しました。

### <広報活動を振り返って>

ホームページでは、最新のお知らせを会員の皆様にいち早くお届けできるよう、随時更新を行いました。また、「同好会ひろば」では、同好会がどのような活動をしているのかを知っていただくために、掲載する内容を精選して発行しました。特に、今回発行した同好会ひろばが300号という大きな節目を迎えたので、特別企画を掲載致しました。お読みいただければ幸いです。

上述の内容は同好会活動のごく一部ではありますが、これらは全て「憧れの人が見付かる」という今年度のテーマに迫ることができるよう、事務局全員で話し合い、考え出したものです。

最後になりましたが、会員の皆様が社会科教師としての力量を向上させることができるよう、12名の事務局員で同好会活動を推進して参りました。至らない点も数多くあったとは思いますが、一年間を通してお支えいただいたことに深く感謝申し上げます。

(名古屋市社会科同好会事務局 長 昭和橋小学校 石原 純貴)

### 【第300号 紙面】

1年間の活動を振り返って.....	(p1)
2月全体会.....	(p2~5)
同好会ひろば 300号特別企画	
「名古屋市社会科同好会は、新型コロナウイルスをいかにして乗り越えてきたのか」	(p6~7)
小・中学校合同発表会.....	(p8)
ステップアップ研修・授業力アップ研修全体会.....	(p9)
『日々雑感』供米田中学校 高橋 直樹 先生・お知らせ.....	(p10)

## 2月全体会 2月8日(木) オンライン開催

2月8日(木)、オンライン会議システム「Zoom(ズーム)」を用いて、2月全体会を行いました。

その中で、名古屋市立小中学校長会社会科部会長 八熊小学校長 出井伸宏先生にご講話を、名古屋市社会科研究会委員長 前野協太先生にご挨拶をいただきました。

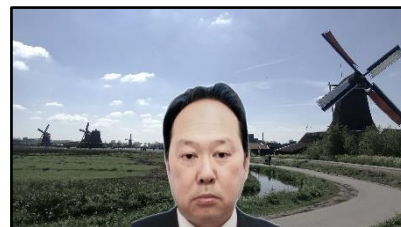
### <名古屋市立小中学校長会社会科部会長 八熊小学校長 出井 伸宏 先生>

今まで「社会科教師として、どのように成長してきましたか？」

今後「どのような社会科教師へと成長していきたいですか？」

このことについて私自身の社会科教師としての成長を振り返りながら皆さんに問い掛けたいと思います。

教育センター研究調査部長の時、オランダのイエナプラン教育の海外視察に行ったことが大きなきっかけとなり、「いつまでも学び続けることの大切さ」を実感しました。写真の左側の本は、自分の実践をまとめたもので、私の指導体験記録と研究員時代に取り組んだ実践の記録集です。社会科なので、時代が変わっても不易の部分が多くあります。教材づくりは足で稼ぐとか、問題解決学習とか…。右側の本は、オランダで学んできたワールドオリエンテーション(日本の総合的な学習の時間に類似)の考え方を生かして、“個別最適な社会科の課題別学習”や“個別最適な学びの成果をどう協働的な学びに生かしていくか”という提案をしたいと思い執筆しました。例えば、6年生の歴史学習で、織田信長の研究に取り組んだ子どもたちが「桶狭間の戦いでなぜ今川義元の大軍に勝てたのか」という問いの答えを提案し、他の子どもたちが質問しながら議論し合うという実践の授業記録を掲載しています。それと並行して、出版社の依頼などに応えて小論文を執筆しながら大学院にも進学し、社会科教師の教育の研究を行っていくことになりました。



いよいよ本題に入ります。皆さんは**社会科教師として、どのように成長してきましたか**。教職6年目以下の方も、7年目から10年目の方も、その他の方も…少し思い出してみてください。どのような社会科教師で、どのような授業実践をしていましたか。鮮明に思い出せる方もいれば、今まで振り返った経験のない方もいらっしゃるかもしれません。例えば、自分自身の将来へのモチベーションはいかがだったでしょうか。私の場合、教職5年目ぐらいに「名古屋で1番、話合いが上手なクラスをつくりたい、つくることができる先生になりたい」と思っていました。他にも、人との出会いや学校の環境、家庭の状況など、教師を成長させる様々な要因がプラスにもマイナスにも働いてきたのではないのでしょうか。

初めに、私はどのように社会教師として成長してきたのかを伝えたいと思います。私の成長を支えたのは教育実践記録(現在の指導体験記録)の存在です。毎年、年末年始を使って体験記録や研究員になるための研究計画書を執筆し、リフレクション(学術的には「省察的实践」)し続けました。よい実践をすると、教育委員会から賞がもらえました。これも励みになったことは確かです。教職6年目までの初任校では、当時生活科が新設され、社会科の学習においても具体的な活動や体験が一層重視されるようになったり、全国でも体験的な学習活動を生かした社会科がブームになったりしました。(その後も総合的な学習の時間の新設や学校完全週5日制の開始など、様々なことを経験しました。)その変化の中で、私がどのような教材を開発し、どのような体験的活動を工夫したのかについて、代表的な実践を紹介します。

教職4年目の時には、5年生の水産業の学習で「巨大マグロはどこから日本へやってくる?」という実践を行い、本物のマグロを教室に持ち込みました。また、教職5年目の時には、6年生の歴史学習(江戸時代

の始まり)で徳川家康と名古屋城に関する実践を行い、清正石の大きさを体感するために石引きの体験を子どもにさせました。その他にも、運動場に実寸大の東大寺大仏をかいたり、名東区出身の柴田勝家を教材として取り上げ、地域の探検活動や郷土史に詳しい住職さんへの聞き取り調査を行ったりするなど、特に単元の導入に力を入れた実践を行っていました。地域の人々から学ぶ活動は、現在でも求められていると思います。当時の歴史学習では、体験的な活動をふんだんに取り入れて実践を行っていました。また、産業学習でも、「触る」「作る」「やってみる」「(伝統工芸士などから)聞き取る」など、体験的な活動をふんだんに取り入れました。伝統的な産業も取り扱っていたので、緑区の有松絞りを学習する機会もありました。子ども達が作った有松絞りの作品とプロの作品を比較する活動から、有松絞りの歴史や技術、職人の努力・工夫などを学ばせていきました。

教職7年目になると、別の学校へ転任しました。そこでの3年間は、新しい学力観の授業について考えました。また、指導体験記録を執筆することが自分の年末・年始の仕事に位置付き、年々その内容を冷静に振り返ることができるようになりました。その結果、教職5年目までの実践が教師主導のもの(教師の思惑どおりに子どもをひっぱる授業、体験記録)であったと気づき、反省しました。「どのような体験的活動を単元の中に入れるのか」という活動ありきの実践になってしまっていたことから、「教材開発の工夫」プラス「一人一人の子どもが生きる授業」への転換を自分自身が求めるようになりました。そして、「教える授業から見守る授業へ」という目標を自ら立て、「(子どもの活動やそれによる反応を)待つ授業」を少しずつ増やしていきました。また、日々の子どもの考えや意見を丹念に集積する中で、一人一人に対する学習支援も考えることができるようになりました。その際、前時の学習問題や討論する学習テーマに対する子どもの考えを書き入れた「座席表カルテ」を活用することによって、議論を巻き起こすための第一発言者を決めたり、社会科の授業で発言する機会の少ない子どものよい考えを把握し意図的に発表させることによって自信をもたせたりしていました。

そのようなことを繰り返す中で、ただ闇雲に実践を積み重ねていた6年目までの自分が、次第に課題をもって実践に取り組めるように成長していきました。そして、“より良い社会科授業”を本当に目指すのであれば、「子ども理解」を徹底的に行ったり、戦後初期における社会科が大切にしてきた「自分ごととして切実感をもった問題解決学習」を学んだりすることが必要だと感じました。その結果、目の前の子どもたちがどんどん変わっていくことを実感することができましたし、それが教師として何よりの喜びとなり、やる気も呼び起こしてくれました。

当初、私は「教師の意図で創られたサブプリント」を使った、教師主導の授業を行っていました。しかし、子どもとともに授業をつくっていくために、「白紙のプリント」を活用して授業を展開したり、板書を子どもとともにつくったりするなど、子どもの出方に合わせた授業を目指していこうと考えが一変しました。(これは偉大な社会科の先輩に熱心に指導された結果です。)また、毎時間の板書を撮影して一人一人に配り、ポートフォリオにして綴るようにしたことで、子どもが自主的に学習を振り返ることができるようにしました。

教職8年目の頃になると、指導案にも「座席表カルテ」を添付するようになりました。この座席表を活用することで、授業の導入に議論を巻き起こすことが常時活動となり、これが自分の授業のスタイルとして確立しました。当時、学区にあった神沢池を埋め立て(蓋をして)、地上を公園として利用するような計画が持ち上がっていたため、「ぜひ、これを教材化しよう」と思い、実践を行いました。当時の区政協力委員長さんにも加わってもらいながら、神沢池の自然をそのまま残すのか、埋め立てて人間の快適な生活に生かすのか、その中間を求めるのかという話し合い(黒石開発会議)を行いました。ちなみに、私の中でこの実践は「歴史トラベラー」という実践に次いで代表的なものであり、緑区社会科主任会においても模擬授業を行いました。学級の中での協働的な学び合いが発生し、実社会とのつながる実践ができたと思います。

特に、学区の人の考えに対して「これはほっとけん（ほかっておけない）！」と自分の意見をぶつける子どもの姿に感動すら覚えました。まさに、学区を「たんけん・はっけん・ほっとけん」というネーミング通りの実践となりました。

歴史の授業では、先行して実施していた総合的な学習の時間と連携して、一年間かけて一人の人物を追究し続ける「歴史トラベラー」という活動を行っていました。その中で、「信長チーム」の子どもは、個別の調べを基に歴史の謎解きを提案しました。「どうして織田信長は、今川義元に勝つことができたのか」について、「運がよかった説」「義元に酒を飲ませた説」「こっそり奇襲説」という三つを提案し、どれが一番の要因だったのかについて話し合う、というものです。（自分で言うのも何ですが）この実践は評判になり、指導体験記録でも特選をいただきましたし、全国紙「内外教育」や書籍にも掲載されました。

教職10年目以降は、名古屋市教育研究員を目指して研究計画書を書き続けました。自分の研究テーマを、「子どもたちの学び合い」と「思考の経過を自己評価する（振り返る）」で絞り込み、子どもの成長を数値で表して、分析することができるようにしました。今でいう「振り返り」「ポートフォリオ評価」「子どもの主体的な学び」の研究に通じるものだと思います。手立ては、「意思表示板」とネーミングしました。平成16年度、28年度に名古屋で開かれた全国小学校社会科教育研究大会でも、大会理論と各会場の実践の目玉となったのではないかと自己分析しています。

教職15年目は同好会の事務局長、16年目は教務主任となり、社会科研究会の役員を務めました。「後輩があこがれる教師になっているか」と常に自問自答しながら、平成18年度には社会科研究会の委員長という大役も務めました。その時のモットーは、「子どもが一生覚えている社会科授業にチャレンジしよう」でした。そして、出会いを大切に、実践者の伴走者となり、仲間や自分を支えてくれる後輩を増やし、協働的に学んでいきました。とても忙しく、帯状疱疹を患うこともありましたが、日々の生活は充実していました。

ここまで到達するには、若いころから尊敬し、慕っている大先輩の支えがありました。平成5年、7年と、「黒石学区の開発」「歴史トラベラー」の実践で私が悩んでいたころ、休日を返上して、共に地域をフィールドワークしてくださった、かけがえのない永遠の師です。その姿から、私もできるだけ多くの人々に、師から学んだ授業づくりのノウハウを伝えたいと強く感じている今日この頃です。

教育委員会の要職を終えた後、現在の八熊小学校に赴任しました。最近「自分の成長『ライフストーリー』と他者の成長の違いは何だろう」や「何が似ていて、何が違うのか。一般的な成長傾向は存在するのか」という疑問を、「社会科教師はどのように成長していくのか」という普遍的な問いに変換し、大学院の修士課程と博士課程の中で、学術的に明らかにしようと熱中しています。

最後になりますが、皆さんは「**どのような社会科教師へと成長していきたいですか？**」夢や目標をもって学び続けてほしいと願います。例えば、

- ・ あこがれの〇〇先生のような実践者になりたい。研究者になりたい。
- ・ せめて社会科の授業では「話し合い」が名古屋市で一番できる学級にしたい。
- ・ 子どもが一生覚えている、魂をゆさぶる社会科授業がしたい。
- ・ 校内でみんなに信頼される授業実践のリーダーになりたい。……

この時期はしっかりと振り返りをして、次年度に向けた実践計画を立ててほしいと思います。例えば、

- ・ 入賞した指導体験記録を熟読し、検討する。
- ・ 社会科の指導に関わる本をたくさん読む。
- ・ 「ナゴヤ学びのコンパス」を熟読し、社会科にどう生かすことができるのか議論し合う。

今後の皆さんの実践に期待すると共に、退職後も、いつまでも社会科同好会を支援する一人として見守っていきたいと思います。

## ＜名古屋市社会科研究会委員長 八幡小学校 前野 協太 先生＞

始めに、名古屋市社会科研究会では、市教研の運営、「夏・冬の生活」や「私たちのきょうど」の執筆をはじめ、名古屋市全体の教育に関わる活動に取り組んできました。研究会から依頼する仕事の多くは、勤務時間外や休日を使って仕事に取り組んでもらう必要もあったかと思えます。職場だけでなく、ご家庭にも迷惑をお掛けすることになってしまったかと思えますが、ご協力ありがとうございました。皆さんの頑張りのおかげで、感謝の電話がたびたび入ってきています。多くの方に貢献できていると捉え、今後も担っていただけるとありがたいです。



また、4月の全体会では、「インプットとアウトプットをしてください」と皆さんに話しました。今年度、同好会活動に参加した中で、“何かを学びとろう”“仲間と一緒に学びを深めよう”とする会員の姿を多く目にする事ができました。また、指導体験記録や教育研究員への応募論文にも多くの方が取り組み、自分の学びを書き残したり、今後につなげようとしたりする内容が見られ、本当に嬉しかったです。執筆された先生方はもちろん、指導して下さった先生方や関わって下さった先生方、本当にありがとうございました。

次に、これからの社会科教育についてです。「GIGAスクール構想」が始まり、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の重要性が説かれ、そして「ナゴヤ学びのコンパス」が示されるなど、ここ数年で教育が大きく変わろうとしています。学ぶ内容というよりも、学ばせ方…いや、児童生徒の学び方が大きく変わる時が来ています。次年度、小学校は教科書が改訂されます。それに合わせて、令和6年度の教育課程改訂では、「ナゴヤ学びのコンパス」を見据えて、「調べること」「調べる方法」「調べる順番」を一人一人の子どもが自己選択・自己決定できる「複線型学習」による単元の進め方を示すことにしました。学習帳については、教育課程の改訂に合わせて令和7年度から修正していく予定ですが、先んじて皆さんにお伝えしたいことがあります。今後、皆さんの周りで授業の進め方について戸惑いを感じたり、新しい指導に挑戦したいけれど一歩を踏み出せなかったりする先生が現れると思います。(既に現れているかもしれません。)そんな時、「こうするといいですよ」「この資料を使うといいですよ」などとアドバイスすることができ、校内で「さすが〇〇さん」「〇〇さんに聞いてよかった」と頼られる存在になってほしいと思います。

この様な話を聞くと、もしかしたらプレッシャーに感じてしまう方がいるかもしれません。そんな時は、この社会科同好会の仲間や先輩に、どんどん聞いてみてください。既にそういった実践に取り組んでいる先生がやり方を教えてくれたり、取り組んだことのない先生でも「こうすればいいんじゃないかな」と一緒に考えてくれたりするかと思えます。この同好会のつながりをふんだんに活用して、チャレンジ精神をもって授業づくりに取り組んでいただければと思います。

## ＜意見交流会＞

**研究部**：推進部員を中心に、今年度の活動について振り返り、ご意見をいただきました。

- 推進部員を中心に会を運営することができた。
- 中心実践者に負担が偏らず、全員で取り組むことができた。
- 研究の自由度が高く、学習段階や学習活動、評価の在り方について、主体的に研究に取り組めた。一方で、方向性が示されずに困ったグループもあった。
- 各学年グループや分野グループの横のつながりをもてるような会があると悩みや疑問を解決できるため、ぜひ検討してほしい。
- 方法論だけでなく、学年や分野の特徴が現れる実践を多く知りたいので、教材化や問いについても力を入れてほしい。

**研修部**：若手の先生方を中心に今年度の研修活動の良さと、今後に期待することについてご意見をいただきました。

- 授業づくり講座の対話形式の講座が、自分の聞きたいことを聞けたのでよかった。
- 授業力アップ研修グループの活動は、横のつながりができ、他校での様子を知ること、自分と同じ悩みを抱えている人もいることが分かり、安心できた。
- ステップアップ研修で、年間を通じて指導をいただけることはありがたい。
- 講座では、もっと「社会科授業の基礎・基本」のようなところから教えていただけるとありがたい。
- フィールドワークもオンライン交流会も、誰が参加するかが気になる。知っている先生が多く参加するなら行きたい。

## 名古屋市社会科同好会は、新型コロナウイルスを いかにして乗り越えてきたのか

今号で節目の300号を迎えた名古屋市社会科同好会の瓦版「同好会ひろば」。第251号が刊行されてからの約10年間を振り返ると、全小社・全中社の催行をはじめとして、様々な出来事がありました。しかし、その中でも新型コロナウイルスの世界的流行による影響はとて大きなもので、同好会活動も様々な変更や制約を強いられることとなりました。2023年5月には、新型コロナウイルスが5類感染症へと移行したことを受け、以前まで行っていた同好会活動も少しずつ再開することができるようになりましたが、今日に至るまでの苦労は計り知れません。そこで今号は、特別企画としてコロナ禍を歴任した事務局長にご参集いただき、みだしのテーマについて対談していただきました。(以下、敬称略)



### コロナ禍の同好会活動について

**石原** ご参集いただきありがとうございます。早速ですが、コロナ禍の同好会活動について対談を始めます。まず、令和2年度に事務局長だった大西先生、いかがでしたか？

**大西** 「どう対応すればいいのかわからない」というのが率直な感想です。それでも、同好会の歩みを止めるわけにはいかなかったため、活動を続けるための方法を模索しました。ただ、日々公表される感染者数には波があり、直前まで各会の開催の可否を判断することができませんでした。現在では当たり前となったオンライン形式の研修も、セキュリティ面や操作面などの不安から、導入するまでに時間がかかりました。

**石原** 確かに、前例がありませんでしたからね。コロナ禍における同好会のスタンダードを確立するために、大西先生が先頭で引っ張ってこられたことがよく伝わってきます。

**大西** しかし、皮肉にもコロナ禍によって働き方改革が一気に進みました。また、「やめること」よりも「実施すること」を判断する方が、何倍も難しかった時期でしたね。

**石原** 新型コロナウイルス感染症のまん延初期は、同好会の方向性を模索した時期だったのですよね。次に、令和3年度に事務局長を引き継がれた西脇先生、いかがでしたか？

**西脇** 新年度が始まると同時に、前年度の事務局員が半数以上入れ替わることとなり、いきなり不安なスタートでした。

**石原** つまり、コロナ禍前の同好会活動を知る人員が減ってしまったということですね。大きな痛手だったと思います。

**西脇** しかし、大西先生がコロナ禍における同好会活動の方向性を示してくださったこともあり、私はより良く変革する機会を得ることができました。そして事務局の先生方と力を合わせ、何とか同好会の舵取り役を担うことができました。

**石原** 先生のように、コロナ禍の混乱期を支えてくださった方々の取組によって、同好会はその歩みを止めることなく進み続けることができたのですよね。そして、令和4年度に事務局長を引き継がれた森山先生、いかがでしたか？

**森山** 西脇先生もおっしゃっていましたが、私の場合も既にコロナ禍における同好会活動の方向性が示されていたので、本当に自由にやらせていただきました。例えば、同好会のホームページをリニューアルしたり、LINEの公式アカウントを開設したりするなど、新たな取組をいくつも進めることができました。また、コロナ禍に入ってからある程度の期間が経過していたため、各研修の実施方法もオンライン形式なのか、対面形式なのかを選択することができました。少しずつですが、効率化が進んでいった時期でしたね。

**石原** コロナ禍における同好会活動を進める上で、オンライン形式の導入はとても効果があったと思います。実際に、研修会場まで移動に時間が掛かったり、勤務終了後すぐに帰宅しなくてはいけなかったりする先生方からは、「オンライン形式の導入によって、参加できる研修会が増えた」という声があがっています。

**森山** また、昨年度は3年ぶりに懇親会を実施する方向で準備を進めていたのですが、新型コロナウイルスの急速な感染拡大を受け、開催1週間前に中止の判断を下すことになってしまいました。もちろん、その可能性については予想していましたが、実際に対応するととなると大変でした。

**石原** 予測のつかない変化に振り回された令和4年度だったのですよね。そして今年度、私が事務局長のバトンを引き継がせていただきました。私の場合は、新型コロナウイルスが5類感染症へと移行されたことを受け、オンライン形式に移行した各会を対面形式に戻すのか、そのまま継続するのかという点について頭を悩ませました。ただ、どちらにしても、その形式で行う意義を、参加する先生方に示すことができて喜んできました。

## 学びを止めないためにも

**石原** 大西先生のお話の中に、「同好会としての歩みを止めるわけにはいかなかった」というフレーズがありました。そう思われるようになったきっかけとは、何でしょうか？

**大西** コロナ禍に入る前より、指導体験記録の応募数が年々減少し続けていたことは、みなさんご承知のことだと思います。そこに、新型コロナウイルスという逆風が吹いたことで、同好会活動の良さである授業づくりを追究することも軽んじられるのではないかと懸念し始めたことがきっかけです。このまま、同好会の学びが止まってしまうのではないかと思いました。



**石原** それでも、歩みは止まりませんでしたよね！

**大西** そうなんです！同好会では、元からステップアップ研修をはじめとした指導体制がしっかりと確立しており、それがコロナ禍でもしっかりと機能していたからだと思います。その結果かどうか分かりませんが、社会科として指導体験記録の応募本数は激減しなかったですし、推進部会でも例年に引けを取らない活動を行うことができました。

**石原** それは、やはりオンラインでも研修ができるようになってきたことが要因でしょうか。

**森山** 昨年度は、オンライン形式と対面形式のハイブリッドで研修を行いました。大変でした。今後行うのであれば、運営する人員をもっと確保することが望ましいと思います。

**石原** 最近の例えていえば、オンライン交流会もその在り方が問われています。コロナ禍という特殊な状況の中でも、人と人との交流を生み出したいと始めたものでしたが、新型コロナウイルス感染症への移行とともに参加者も少なくなりました。確かに「学びを止めない」というねらいには合致しているものの、対面形式での実施が可能となった今、オンライン交流会はその役割を終えたのかもしれない。

**大西** ステイホームだったからこそ、魅力がありましたよね。

**西脇** コロナ禍でオンライン形式が当たり前となり、どこにいても研修に参加することができるようになった反面、研修がもつ魅力自体が損失してしまったように私は感じています。



**石原** 西脇先生のおっしゃる通りで、結果的に何でもオンライン形式化ということにはなりません。実際に、対面形式でしか実施できない研修もあると思います。例えばフィールドワークがそれにあたりますが…

**大西** 実際に現地を訪ね、授業に生かすことのできる教材を集めるのが、フィールドワークの売りですよ。ひと昔前は泊を伴っていたり、終了後に親睦会が催されていたりするなど、今とは違う楽しみも付随していました。

**西脇** でも、現在の同好会会員は、それを魅力として捉えているのでしょうか。「忘年会は業務か？」と尋ねる若者のニュースではないですが、会員が何に魅力を見いだしているのかを知り、各研修で提供していく必要があると思います。

## 『魅力ある同好会活動』を目指して

**石原** それでは、現在の同好会会員にとって、『魅力ある同好会活動』とは、一体どのようなものなのでしょうか？

**西脇** 例えば、宗實直樹先生（関西学院初等部教諭）や由井菌健先生（筑波大学附属小学校教諭）らは、魅力ある講座をオンラインで次々と発信しています。今年度の同好会のテーマである『憧れの人が見付かる同好会活動』にも関わりますが、「この講師なら参加したい!」と思えるようなビッグネームをゲストに呼ぶことも、一つの方法だと思います。

**大西** 算数科の研究会では、(私立を含む)高校と連携して研修を行っているそうです。小・中・高の三つの校種が連携することで、教師としての技量を高めるだけでなく、視野を広げることもつながっているようです。

**西脇** 社会科同好会も、名古屋の小・中学校の中だけでとどまっているようでは、良くないのかもしれないですね。自分たちの実践をどんどん外部に発信し、交流を深めていくことが大切だと思います。

**森山** そう考えると、今年度の小中学校部会で行っているように、自他の実践について積極的に意見交流をするという取組はとて素晴らしいですね。個人的には、競い合わせるくらいいいと思います。可能であれば、推進部員だけにとどまらず、会員全員が自分の実践を伝え合うくらいの活気がほしいです。



**石原** 魅力ある同好会活動を提供していくためには、授業実践をベースとした一人一人の研鑽が必要となってくるといことですね。それに応じるために、従来の仕組みを大きく変えていく時期に差し掛かっているのかもしれない。

**西脇** でも、オンラインでの研修が進んだことと同じで、何でも変革すればよいわけではないですよ。これまでの取組を軸にしながらかえていくことが大切だと思います。

**森山** ホームページもリニューアルしたので、そこにあらゆる世代の先生の授業の様子を掲載すれば、それも同好会の魅力の一つに加わるのではないのでしょうか。

**西脇** それ、いいですね。「この実践なら自分にもできるかも」「真似してみたい」などのように、そこから多くの会員が魅力を見いだすことができるようになると思いますし、論文を執筆するための授業実践から脱却することもできそうな気がします。

**大西** そのためには、事務局を含めた全ての同好会会員が、「こんな先生になりたい」という目標をもつことができるようになるといいですよ。

**石原** 今回の対談では、『魅力ある同好会活動』がどのようなものなのか、その本質に迫ることができたような気がします。この様子を、全ての同好会会員に伝えることができることを、とてもうれしく思います。本日は、どうもありがとうございました。



## 小・中学校合同発表会 1月18日(木) 於 中小企業振興会館

1月の小・中学校合同発表会は、1年間、各学年グループ・分野グループで研究を重ねてきた集大成の場となりました。発表会には、日ごろ同好会研究に携わっている推進部員の他に、今後の推進部員を担うであろう若手同好会員の方々にも多数参加していただきました。

今回の小・中学校合同発表会では、若手会員の皆さんに「こんな実践をやってみたい!」と思ってもらいたいというねらいをもって開催しました。各グループの発表では、実際に使用した子どもたちの思考を揺さぶる資料をプレゼンテーションソフトで提示したり、目指す子どもの姿に至った経緯を推進部員が模擬授業形式で具体的に再現したりするなど、様々な工夫がみられました。



その後、いくつかのグループに分かれて、「どの実践に取り組んでみたいか」というテーマで協議を行いました。そこでは、若手同好会員が推進部員に対して積極的に質問する姿も見られ、とても活発な協議となりました。また、今年度の実践で重視してきた項目の内、「指導と評価の一体化が図られており、主体的に学習に取り組む態度の評価として妥当であるか」についての質問が多く飛び交いました。そこから、若手会員が指導体験記録や教育研究員の応募論文への取り組みを通じて個人研究に真摯に取り組んでいる成果や社会科に対する熱意を感じたと同時に、今後の同好会研究部を支える存在となりうることを確信する頼もしさを感じました。

協議の後には、今年度の実践で重視してきた「子どもが夢中になって学び続けるための学習問題となっているか」や「学習問題の解決に向けて、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実が図れる学習活動となっているか」、「指導と評価の一体化が図られており、主体的に学習に取り組む態度の評価として妥当であるか」の3点について、それぞれ5段階で評価してもらい、さらに特筆すべき点を具体的にあげてもらいました。その際、Formsのアンケート機能を活用したことで、会員の皆さんの意見を素早く共有することができました。アンケートでは、以下の様なご意見をいただきました。

- ・「ゲストティーチャー(消防団)と関わりながら防災マップを作成する点や、ゲストティーチャーとの関わり自体が自分事として考えるきっかけとなっている点となっていて素晴らしい」(3・4年生部会へ)
- ・「2段階の学習問題を設定することによって、学びの意欲が持続しやすいと分かった。このやり方は初めて聞いたので、自分もやってみたいと思った」(5年生部会へ)
- ・「“伝統を受け継ぐ大切さ”を身近に感じられるようにするためにゲストティーチャーを呼んだことで、児童が文化を受け継ぐ理由を述べられるようになっていた。ぜひ、自分もやってみたい」(6年生部会へ)
- ・「中学校の実践では、個別最適化がなかなか難しいと思っていたが、その糸口がつかめた良い実践だった。特に、4シートで仮説をつくる方法が面白かった」(地理的分野部会へ)
- ・「歴史学習だと、特定の人物や出来事へのフォーカスになりやすいと思っていたが、連続性を大事にしたテーマ設定であったことを知り、「こういうやり方もあるのか!」と強く感銘を受けた」(歴史的分野部会へ)
- ・「本物の弁護士さんをたくさん呼ぶことで、生徒の関心が高まり、意欲的に取り組むことができるようになると思った。ゲストティーチャーは、中学生もワクワクさせることができることが分かった」(公民的分野部会へ)

今後も、研究部で活躍する推進部員や若手会員が切磋琢磨することで、同好会の研究レベルが向上し、名古屋市の社会科をリードしていく存在になっていくと思います。各グループが真摯に取り組んだ実践により、研究部として大きな成果を得ることができました。素晴らしい実践ありがとうございました。



## 第3回ステップアップ研修・授業力アップ研修全体会 2月2日(金) 於 名古屋市公会

2月2日(金)、名古屋市公会堂にて第3回ステップアップ研修・授業力アップ研修全体会を開催しました。今回は、今年度の指導体験記録を執筆した先生の中から8名の先生方に、実践について紹介していただきました。小グループに分かれ、実践の紹介と質疑応答の時間をとりました。世代の近い先生同士で検討したことによって、自分の実践と照らし合わせたり、互いのもつ悩みを共有したりすることができました。また、同好会員同士の「横のつながり」を築く場ともなりました。



A	湊 悠希 先生 (大須小・1年)「プロジェクト、やってみよう! -生活科におけるプロジェクト型学習を通して-」 吉川 武蔵 先生 (陽明小・1年)「陽明・幼保小架け橋プロジェクト-学びを進める力を培う生活科学習-」
B	安藤 勇人 先生 (蓬来小・3年)「大きくなったら消防団員になる! -地域への関心を高めることができる社会科学習-」 藤山 貴伸 先生 (稲生小・3年)「主体的に地域の特色を追究しようとする子どもが育つ社会科学習-学びのコンパスの考えを生かして-」
C	伊藤 大智 先生 (大宝小・5年)「よりよい社会の実現を考えようとする子どもの育成~二つの協働的な学びを通して~」 渡邊 丈芳 先生 (道徳小・5年)「主体的に問題解決しようとする子どもの育成~一人一人の問いを大切にしたい社会科学習~」
D	堀田 拓和 先生 (富士見台小・6年)「獲得した知識を裏付けとして、より良い考えをもつことができる子どもの育成」 川畑 裕史 先生 (ほのか小・6年)「困惑をわくわくに 主体的に学習するほのかっ子の育成」
E	山口 恭平 先生 (戸田小・6年)「多様な人とともに自ら学びを進めることができる歴史学習」 小笠原 直希 先生 (豊治小・6年)「仲間とともに学び合い、学びを生かすことができる子どもの育成~より良い未来を提案する歴史学習を通して~」
F	栗栖 孝明 先生 (長良中・1年)「もっとたくさん調べていきたいです!!~見通しをもち、仲間と学び合うことで主体的に学び続けようとする生徒の育成~」 小木 英梨奈 先生 (明豊中)「よりよい社会を考えようとする生徒の育成を目指す社会科学習-歴史的分野と公民的分野の接続を通して-」

### 〔参加された先生方の声〕

対面開催だったことで、実践内容について気軽に質問し合うことができました。また、大変だったことや今後の方向性などについても知ることでよかったです。

【陽明小学校 吉川武蔵 先生】

ステップアップ研修では、年間を通して「刺激」と「情報」を得ることができました。「憧れの人を見付ける」というテーマでしたが、それも数多く見付けることができました。

【小碓小学校 重本健司 先生】

今回、発表者という立場で参加し、たくさんのアドバイスをいただくことができました。それらを聞いて、「色々やってみなければ!」と思うことができました。

【蓬来小学校 安藤勇人 先生】

また、全体会の終了後には、約30名で交流会を行いました。これまでのコロナ禍では、飲食を伴う集まりの実施が制限されていたため、若手会員同士の関係を築く場が少ないという声があがっていました。そこで、今回のような会を開くことができるとてもうれしく思います。

来年度も交流会を企画していく予定ですので、ぜひご参加ください。

## 日々雑感

### 供米田中学校 教頭 高橋 直樹 先生

あらゆる情報がいつでも見ることができ、とても便利な暮らしが過ごせています。しかし、年始に起きた能登半島地震では、多くの方が被災し情報を得られないことで大きな不安を抱きました。また、混乱に乗じたフェイクニュースが散見されたり、SNSでは他者をいたずらに傷付け貶める言葉が飛び交ったりしています。「つながって当たり前」の社会は、情報化社会という豊かで多様な幸せにつながるイメージがありました。しかし、現実はとても脆いものであるとともに、それに依存しつつある私たちの暮らしは不安定になっています。そんな中、子どもたちの「生きる力」は高まっているのでしょうか。

これまで、電車や自動車、飛行機などの交通手段の発達、人やものをつなげ、グローバル化の一因となりましたが、温暖化の問題や騒音等の公害をもたらし、便利さと引き替えに、私たちは新たな問題を抱えることになりました。

便利に、ラクになるように…という追求は、判断を誤らせることがあるのかもしれませんが、私たちも学校DXや働き方改革を進めることはとても大切なことですが、効率を求めるあまり選択を誤ってはいないか、時に立ち止まりながら歩まねばなりません。何を進めるにも、それらを扱うのは「人」であることを考えると、得意とする人苦手とする人、先に進む人後から続く人、時間の使い方も含めてそれぞれのつながりに優しさが表れるようにありたいものです。それが、互いを尊重する社会の実現へと広がるのではないかと思います。デジタルとアナログが上手に融合した豊かな社会とは何か、そんなビジョンをどう描くかが、子どもの成長とともにある学校現場に今求められているのかもしれないね。

## ～お知らせ～

- 本年度の入会申込書は昨年3月に発送しましたが、来年度は4月上旬に発送予定となっております。ご承知おきください。
- 名古屋市社会科同好会には、公式ホームページがあるのをご存じでしたか？  
右のQRコードを読み取っていただくか、各種検索エンジンで「名古屋市社会科同好会」と入力し、ぜひご覧ください！



**友だち追加を  
お願いします**

LINEの「友だち追加」画面から  
左下のQRコードを読み取り  
追加してください。

**お届けします**

- 同好会ひろば
- 例会案内
- 研究・研修情報